説教要旨『どうして、見えるようになったのか』

ヨハネによる福音書９章１～12 節

東日本大震災から５年。3 月 12 日の朝刊に掲載された福島県の全面広告には、次のような言葉が記されていました。「福島にも、様々な人が暮らしています。括ることはできません。うれしいこと。くるしいこと。進むこと、まだまだ足りないこと。光の部分、影の部分。…あなたの思う福島はどんな福島ですか？あなたと話したい。五年と、一日目の今日の朝」（一部抜粋）。どれだけ福島のことを楽観的に見たり、悲観的に見たりしたところで、私が見たり聞いたり感じたりしているのは、あくまで「あなたの思う福島」であって、まだまだ見えていない福島が何千何万何億とある…そういう思いを持って、東日本大震災の様々を受けとめていくことが最低限の礼儀なのではないかと感じさせられました。

聖書箇所には、イエスが生まれつき目の見えない人を癒された物語が記されています。「生まれつき」ということですから、人間の力ではどうにもならない現実が、この人を覆っています。弟子達は、「この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」（2 節）とイエスに尋ねました。当時、原因の分からない病や不幸は、本人か親族が神の前に罪を犯した結果であると考えられていたのです。そうでも考えないと、この不条理な現実に説明がつかないし、これまで彼らが神の前に清廉潔白であろうと努力してきた甲斐がなくなってしまいかねません。しかし、イエスは言われました。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」（3 節)。そうして、イエスの言葉に従った目の見えない人は、見えるようになっていきます。私達の常識からでは見えていないものを、イエスはその現実のなかに見ておられたのでした。

後に、イエスは、誰が罪人であるかがハッキリ見えていると言い張るファリサイ派の人達に対して、こう言われました。「あなたがたが『見える』と言い張るところに、あなたがたの罪がある」（41 節：口語訳）。私たちの常識や知識や経験値から見えているものは、あくまでも限られたものであるという自覚を欠いてしまう時、かえって視野が狭くなり、真実が見えなくなってしまうという人間の罪をイエスは指摘しています。

イエスこそ神の眼差しを持って、真実を見ておられたことを聖書は告げています。そのイエスの目線に私たちの心の目線を定め、イエスに従い行く中で、本当に「見えるようになる」歩みを目指したいと願います。

（文責：望月達朗牧師）